

『涅槃経』というお経には「慙愧あるがゆえに父母、兄弟、姉妹あることを説く」と言われています。

父母、兄弟、姉妹といった身近な人間関係は、恥ずかしい、申し訳ないという心によって、はじめて成り立つということでしょうか。

しかし、実際の生活においては、相手よりも、自分の方が先に立ってしまいます。自分の思いを通してしか、相手を見れず、本当にいのちある人間として、向き合えていないのが現実です。しかし、人は身近な者が亡くなる縁に触れて、

初めて自分の愚かさに気づく、初めて家族として出会う、有難さが身にしみる、ということがあるのではないのでしょうか。

初七日から四十九日（満中陰）法要は、故人が亡くなって間もなく、遺族にとってみれば心の整理もつかないことも多いでしょう。だからこそ、故人が残してくださった大切な時間として、「一緒に法要に会わせていただきましょう」「亡き方を案じる私が、

「亡き方から見守られていた。」  
「ありがとうございます」故人への感謝の思いを大切に、お勤めさせていただきましょう。

## 《御文章について》

御文章は、本願寺第八代蓮如上人（一四一五～一四九九）が、当時の人々に書き記したお手紙で、親鸞聖人のお示し下さった、お念仏のみ教えを、誰にでもわかりやすく伝えるために、また、み教えに関する誤解や間違いを正す、という目的のために書かれたものです。

御文章は、各地のご門徒に読み聞かせられ、これにより、遠い地までも、浄土真宗のみ教えが広く伝えられることとなりました。

現在、拝読されている、五帖八十通の御文章（聖人一流章・末代無智章など）は、蓮如上人の後を継いだ、第九代実如上人により、多数のお手紙の中から、肝要なものを選び、まとめられたものです。

当時は、字を読める者も少なく、僧侶など、字を読める者が代わりに拝読し、拝聴される方たちは、蓮如上人からの直接のご法話として御文章をお聞きになったことでしょうか。

浄土真宗本願寺派《お西》

# 白骨章